

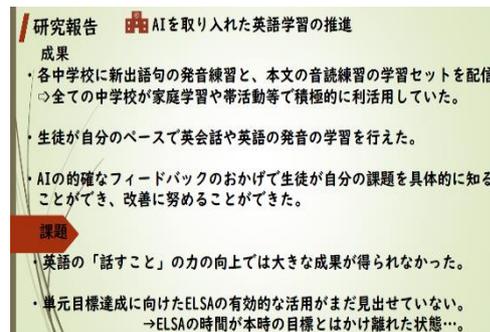
# さざなみ

須崎市教育研究所 発行  
第12号 令和8年2月19日

## 教育研究所後期運営委員会

1月22日(木)に須崎市教育研究所の後期運営委員会を行いました。開会にあたり、竹内教育長より「今年度、市内各校での研究を進められたことは学校の協力があってこそ。感謝を申し上げたい。本市が進めているMake“IT”Funの推進にも関わる英語AI、読解力の向上、不登校未然防止についてさざなみでも発信があった。今日の発表でも触れられると思う。忌憚のないご意見をいただければと思う」とお話がありました。

研究報告では、これまでさざなみで発信してきたことを中心に、分析した結果や成果・課題をお伝えしました。

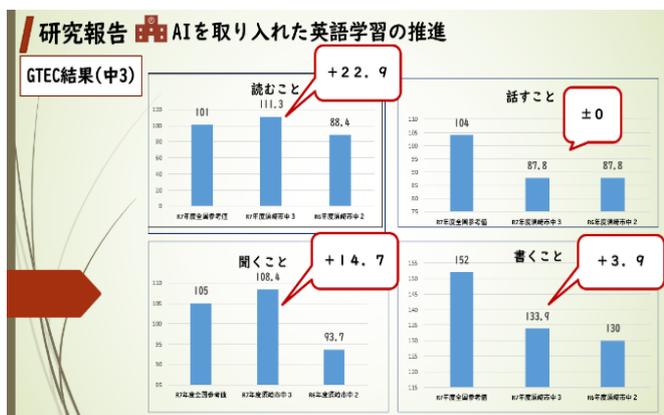


「英語×AI」については、今年度、本市は文部科学省の事業採択を受け、全中学校にAI英語学習アプリ「ELSA Speak」を導入しました。生徒たちの「話すこと」の力を伸ばすため、各校での導入支援や学習セットの配信を行ってきました。現場では、英語担当の先生方が授業や家庭学習で工夫して活用してくださっています。生徒たちは最初こそ操作に戸惑っていましたが、すぐに慣れ、AIによる即時フィードバックの結果に一喜一憂しながら、楽しそうに取り組む姿が印象的でした。各校とも、単元計画の中にうまくELSAを組み込み、実践を積み重ねています。

本年度のGTEC(英語4技能テスト)の結果、およびモデル校における中学3年生の経年変化は以下の通りです。

右図はモデル校の中学3年生の結果です。

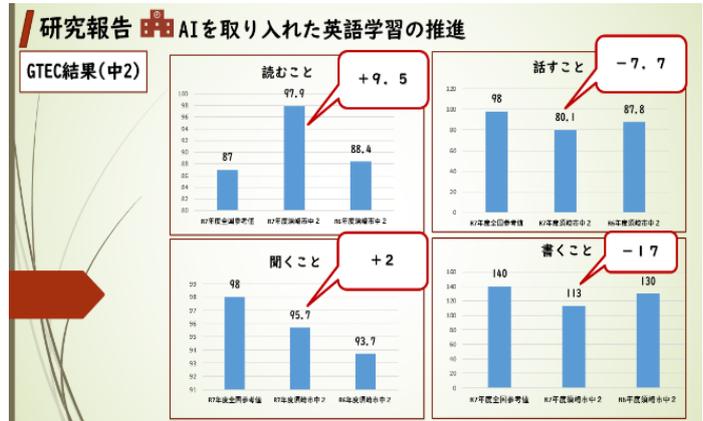
3年生は昨年度と比較し、「読むこと」「聞くこと」において顕著な伸びが見られました。ELSAを通じて英語に触れる機会が増えたことで、インプットの力が強化されたと考えられます。一方で「話すこと」の



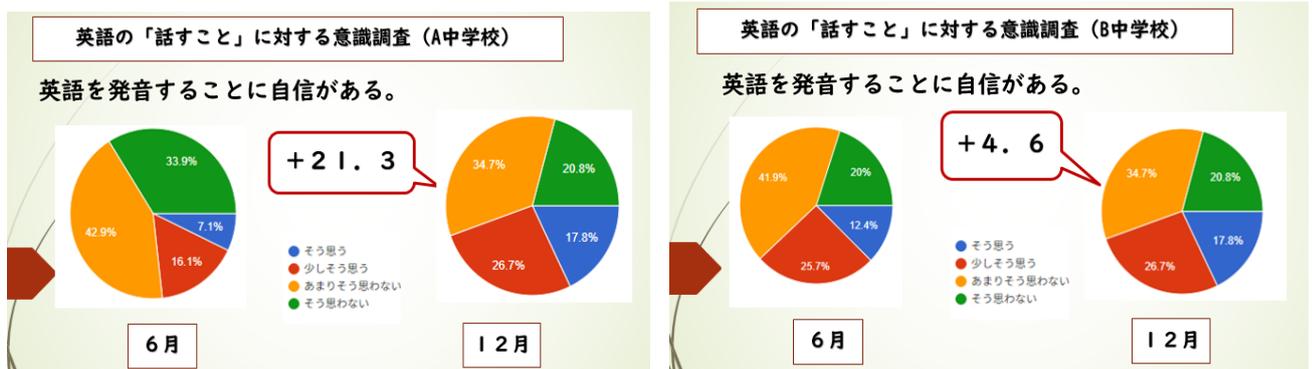
スコアは横ばい（±0）であり、蓄積した知識をアウトプットへ繋げる段階に課題が残っています。

中学2年生では、「読むこと」以外の技能、特に「書くこと」「話すこと」において昨年度の同学年を下回る結果となりました。3年生と比較してもアウトプットへの課題が顕著です。

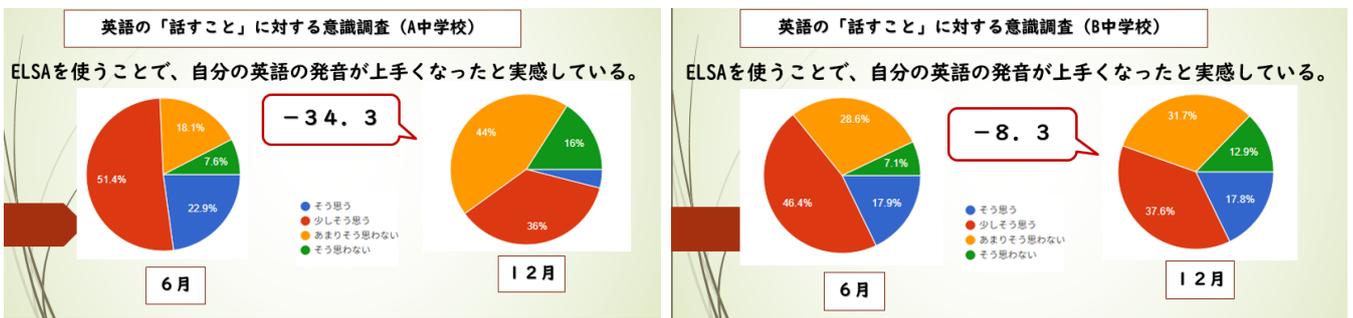
これらの結果から、今後は「AI (ELSA)」  
「授業者」「ALT」それぞれの強みを活かした授業デザインの再構築が不可欠です。「人間にしかできない指導」と「AI が得意とするトレーニング」の役割分担（使い分け）を、改めて整理していく必要があります。



以下は今年度モデル校で行った英語学習意識調査の結果です。



「発音に自信があるか」という設問に対し、両校とも導入後の方が肯定的回答が増加しました。AIによる正確かつ迅速な評価や、家庭で自分のペースで「壁打ち」ができる環境が、心理的なハードルを下げた要因と推測されます。



一方で、「発音が上達した」という実感については否定的回答が増加しました。これは ELSA の評価基準が非常に厳格であり、ALT のネイティブ発音であっても 80 点以下、生徒であれば 50 点以下となることが珍しくないためと考えられます。事前のフォローは行っているものの、厳格なスコアが上達の実感を阻害している可能性があり、今後の指導上の留意点と言えます。

今年度の研究を通じ、従来は授業者や ALT が個別に対応せざるを得なかった発音確認や英会話練

習を、クラス全員が同時に行えるという AI 活用の利点が明確になりました。これにより、教員は支援が必要な生徒への個別サポートに、ALT は上位層への高度な対話に注力できるなど、個に応じた指導の実現に近づきました。しかし、「話すこと」の直接的なスコア向上には至らなかった点が大きな課題です。今後は、単元目標の達成に向けた ELSA のより有効な活用法を模索し、生徒が目指すべき力を確実に習得できるよう、研究を深化させてまいります。

読解力の向上の研究については、今年度は読解力向上に向けた「情報収集」の 1 年となりました。本市の現状を把握するため、学力調査の結果を分析したところ、いくつかの課題が浮き彫りになっています。

・小学校（5 年国語）：

右図の調査結果（高知県学力定着状況調査）が示す通り、説明文の読解において全体的に正答率が低迷しています。長文問題において「文章を読むこと」はできていても、内容の要点を掴む「概要理解」まで至っていない傾向が見受けられました。

・中学校（1 年国語）：

右図の問題では正答率が 36% と非常に低い結果となりました。コメの歴史に関する問題ですが、「突然変異体」という特定の単語に目が止まっただけで、文脈を追わずに選択肢を選んでしまった生徒が一定数いると推測されます。

小・中学校ともに、自分に馴染みのない分野や興味関心が薄い内容に対して、正答率が顕著に下がる傾向があります。初見の文章を「自分事」として捉え、内容を正しく理解する力に課題があると言えます。

10 月に開催された言語科学者・今井むつみ先生の講演会では、読解力の基盤としての「読書」の重要性が改めて強調されました。読書を通じて多様な世界観に触れることは、本人の「推論の幅」を広げることにつながります。この経験の積み重ねが、未知の事象に直面した際、既知の経験から解決策を見出す力（乗り切る術）を育みます。また、日頃から読書で「未知の内容を読み解く訓練」ができていない人は、初めて読む文章に対しても、自分に引き寄せて深い内容理解へとつなげることができません。「読解力の研究」と聞くと難解なイメージを持ちがちですが、幼少期からの「読み聞かせ」も立派な訓練の一つであると学びました。身近なところからすぐに実践できる取り組みが、将来の読解力を支える土台となります。読解力の向上に関するより詳細な報告については、『さざなみ 9 号』にて掲載しております。本市の子供たちの課題解決に向けたヒントをまとめておりますので、ぜひご一読いただければ幸いです。

**研究報告** 読解力の向上に関する調査・研究  
 須崎市の読解力について（R7 年度高知県学力定着状況調査より）  
 ①小学校 5 年 国語より

5(1)「黒板のルーツ」の説明文を読み取る **正答率 56.3%**

解答状況 1…25% 2…7.1% 3…56.3% 4…10.7%  
 (正解)

考えられる誤答要因  
 ④ 説明文の前半の段落のみを読むと 1 が正解に感じる内容である。読み手が最後まで文を読まずに解答したのでは、すべて読んだとしても、概要がつかめていない。(ただ文を読んでいるだけ?)

**研究報告** 読解力の向上に関する調査・研究  
 須崎市の読解力について（R7 年度高知県学力定着状況調査より）  
 ①中学校 1 年 国語より

4(1) コメの歴史についての説明文を読み取る **正答率 36%**

解答状況 1…22.5% 2…9% 3…36% 4…31.5%  
 (正解)

考えられる誤答要因  
 ④ 4 と解答した生徒は「突然変異体」という単語のみに着目して、安易にこれが正解だと早とちりした可能性がある。1 と解答した生徒はそもそも説明文に書かれている内容が読み取れていないのでは?

**研究報告** 不登校・不登校傾向の児童生徒に係る諸問題の改善成果

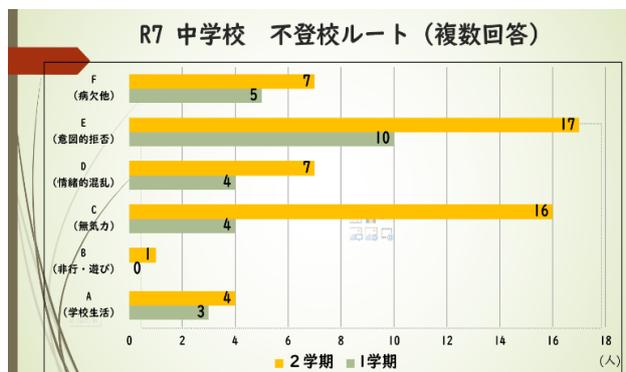
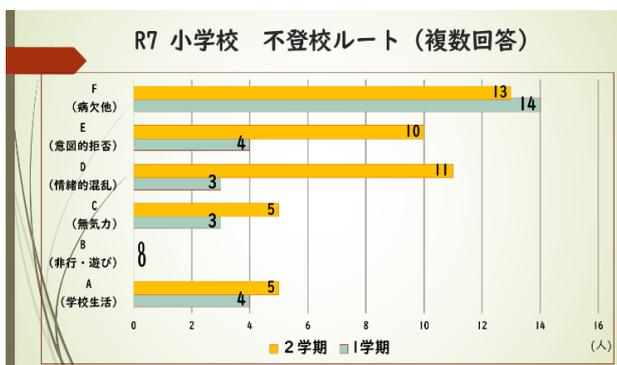
- ・ 支援センターの行事等に参加し、通所生と交流をもつことができた。
- ・ 対策委員会にお呼びした講師から学べるが多かった。
- ・ CoCo オンラインが始まり、支援センターと不登校児童の交流の場が新たにできた。

課題

- ・ 欠席調査の対象者の基準を県の調査に合わせた結果、不登校傾向の児童生徒が対象から外れた。
- ・ 支援機関に繋がれていない不登校児童生徒がいる。  
 (CoCo オンラインを積極的に案内はしているが利用数が増えない…)

不登校については、今年度は「不登校・不登校傾向対策委員会」での講師講話をはじめ、学校、支援センター職員、SSW（スクールソーシャルワーカー）間での積極的な情報交換を行い、多角的な視点を養うことができました。また、毎月の「月 3 日以上欠席児童生徒調査」や学期ごとの

「欠席遅刻調査」から、欠席の背景や児童生徒の細かな変化、傾向を詳しく把握することができました。



欠席理由を分析すると、小学校では「F：病欠等の体調不良」が最も多く、次いで「E：意図的拒否」「D：情緒的混乱」となっています。特に5年生では、これら複数の要因に当てはまる児童が目立ちます。

欠席遅刻調査では「体調不良」とされていても、教育支援センターでは元気に過ごせている例もあります。こうした「情緒混乱型」のお子さんは、これまでの頑張りが十分に認められなかったり、小さな挫折の積み重ねや「こうあるべき」という高い理想に苦しんでいたりする場合も少なくありません。行事が多い2学期は、集団活動が苦手な児童にとって負担が大きくなります。無理をして参加しすぎた結果、エネルギー不足から体調を崩すケースも見受けられます。また、高学年になり学習が難しくなることや、周囲との比較で自己肯定感が低下することも、登校しづらくなる一因と考えられます。

中学校では2学期に入り、C（無気力）とE（意図的拒否）が特に増加しています。無気力型は、「なんとなく行く気にならない」と思っていて家でのいるタイプです。家では元気に見えることも多いですが、主体性や意欲が乏しい傾向にあります。登校刺激によって登校できても長続きしにくいのが特徴です。意図的拒否型は小学校と同様、行事でのエネルギー切れや、集団活動への苦手意識から欠席を選ぶケースが目立ちます。また、中3生では進路への不安が欠席につながる例もありました。こうした生徒へは、本人の良さを認め、目標を共に考えながら、自立を促す励ましが有効です。不登校を未然に防ぐためには、教職員が子どもたちの姿を肯定的に捉え、当たり前のことでも「承認」し「褒める」こと、そして子ども同士が互いを認め合える学級の雰囲気づくりが重要であると再確認しました。

今回の研究は、学校現場を離れての活動でしたが、先生方のご協力なくしては進めることができませんでした。心より感謝申し上げます。現在、研究紀要を編集しております。完成した際には、ぜひご一読いただければ幸いです。